

『青山史学』四十一号正誤表

頁・段（上段・下段）・行	誤	正
三一頁・上段・一七～一八行	『盛岡藩家老席日誌』	『南部藩家老席日誌』
一九六頁・下段・七行	紙上内臓	紙上内蔵
二五二頁・下段・一三行	Nステ	Nスペ
二六二頁・下段・五行	生死と分けた場所	生死を分けた場所

幕末期長崎在番京宿老巨智部忠陽の交流関係

— 在地社会における別段風説書をめぐる情報環境 —

岩 田 み ゆ き

はじめに

本稿では、長崎において天保十一年八月まで京請払役兼糸目利役をつとめ、弘化二年から慶応二年まで、京糸割符宿老として長崎に在勤した巨智部忠陽（英三郎）の日記・記録である、天保十一年『従交代到帰京日録^①』と弘化二年から安政四年までの『要録^②』を検討し、長崎における主な交流関係を概観し、京糸割符宿老巨智部忠陽をめぐる情報環境とそのなかでの役割について明らかにすることを目的とする。但し、ここでは長崎貿易に関わる長崎奉行所や長崎会所での公務にかかわる関係以外の、どちらかといえば私的な関係に注目して検討していくことにしたい。

さらに、巨智部忠陽方に集まった海外情報については前稿で明らかにし、特に通常のオランダ風説書については毎年定期的に入手し、全文を記録して京都の糸割符会所へも送られていた事実を改めて確認したが、一方別段風説書については、入手の記録はみられなかった。しかし、『日録』・『要録』等に記録がないからといって、別段風説書をはじめとする極秘とされる海外情報について、長崎の海外貿易の最前線にいる宿

老たちが全く耳目に触れる機会がなかったとするのも不自然のように思われる。その可能性も含めて、交流関係の中から検討してみることしたい。

そこで、一では、同居する長崎の京糸割符会所の人々など巨智部忠陽の身近な人間関係からはじめ、公務だけでなく日常的な交流を繰り広げる人々との交流関係、諸国から来訪する人々について概観してみたい。また、二では、巨智部忠陽の交流関係の中でも、海外情報、中でも別段風説書と密接に関わりをもつ人物に注目してみてゆきたい。

1 京宿老巨智部忠陽の長崎における私的交流関係

ここでは、長崎における巨智部忠陽の人間関係について、特に私的な交流に注目してみたい。

①巨智部忠陽と長崎京糸割符会所に同居する人々

巨智部忠陽（英三郎^④）は、文化八年（一八一二）に生まれ、慶応二年

(二八六六) 十一月十七日に五十六歳で長崎で亡くなっている。天保二年(一八三一)から天保十一年三〇歳まで十年余り「京糸割符請払役御物反物并糸目利兼帯」役として長崎に在勤し、八月二十七日長崎を出立し京都に帰郷している。『日録』には、この日の詳細な記録があり、大勢の見送りとともに、別れ際によんだ歌が記されている。巨智部忠陽のあとをついで長崎在勤京請払役に就任したのが八里賢五郎である。この時期の長崎在勤京宿老は森川良右衛門であったが、五年後の弘化二年(一八四五) 忠陽が三十五歳のときに森川と交代で、今度は宿老として再び長崎に着任したものである^⑥。巨智部忠陽の住居すなわち長崎の京糸割符会所は当初南馬町であったが、嘉永五年(一八五二) 十一月二八日炉柏町呉碩三郎方に転居している。転居先については、六月頃には濱武・森ら長崎宿老の世話で、唐通事の呉碩三郎方に決めていたよう^⑦で、七月には家代の岩田恒十郎を借主として、呉方に銀七貫五百匁を渡している。呉碩三郎は、「家主」と記載されている。

巨智部忠陽の長崎での家族構成については、転居した翌年の嘉永六年正月四日に次のような記載がある。

「一、明五日ヶ所居町炉柏町絵踏ニ付人別書付差出候様申来候ニ付
半切相認乙名家原良助方へ為持遣候

一、浄土宗	巨智部英三郎	歳四十三
	伊藤権之祐	歳廿三
同母	つや	歳四十八
同妹	いま	歳十八

手代	利助	歳五十五
下女	あや	歳五十
家代	恒十郎	歳二十八 ^⑧

これを見ると、長崎では、巨智部忠陽と、伊藤権之祐とその母・妹、手代、下女、家代で一家を構成し、人別帳に記載されていることがわかる。巨智部忠陽は京に留守宅があり、単身で長崎に着任していたようである。結婚の時期は不明だが、嘉永七年二月十三日に男子が出生し、三月十三日に宮参り、五月五日に「小兒小太郎初節句」、五月二十七日から二九日には海部屋市左衛門・山際藤之助・井吉三郎兵衛・濱武信之助・呉碩三郎・竹斎老・徳見茂四郎・森亦四郎・濱武治兵衛・海部屋乙次郎・林熊十郎・安川吉左衛門ら、家主と宿老らを招待して三日間におよぶ初節句祝いを開いている記載があることから、このころには長崎で家族をもち、長崎に根付いた生活をしていたことがわかる。妻はお藤とい、詳細は不明だが、安政二年六月頃から病いになり、笠戸・石川・久世直記ら医師に見せたがその甲斐なく、同年七月二九日に亡くなっている^⑧。伊藤権之祐は「京糸割符請払役御物反物并糸目利兼帯」として、巨智部忠陽と同様に京都の糸割符会所から派遣されてきたもので、弘化五年三月四日に、前任の八里賢五郎に代わって着任している。嘉永二年四月二〇日には、「京糸割符請払役御物反物并糸目利四力所順番反物手本見役兼帯」を任命され、宿老に次ぐ重要な役割を担っていた。岩田恒十郎は、弘化三年八月父熊之進の跡を継いで家代となった人である。家代は「物代役」と記載される場合もみられ、請払役・筆者とともに長崎

会所での貿易業務に従事する他、家の代表として借家人になったり、巨智部家の来客にお茶を出したり、初午・祭礼の手配・案内、葬式の名代など家の行事にも携わっている。

手代は、家の業務を担うものとして信頼のおける人物を一名雇っていた。弘化から安政にかけて、数名の名前がみえている。弘化二年から四年一月までは宇兵衛、その後をついで又兵衛（亦兵衛）が手代をつとめたが、嘉永二年一月二日病により死去している。又兵衛にかわって手代となったのは、前年の弘化五年十月に既に長崎に到着していた丹波国熊野郡海士村出身の辻学二（学次・覚二・覚次）であった。学二は翌年から手代として働き始めるが、嘉永四年二月から巨智部方を離れ、長崎磨屋町の阿部魯庵のもとに食客として滞在している。阿部魯庵は、長崎の蘭学者・蘭方医であり、同じ頃楠本いねも産科・外科を学んでいたことが知られている。学二は、阿部魯庵方に滞在したのち四月十九日から「古川町外塾」へ移り、五月病気で一旦帰宅するが、六月再び「阿部外塾」へ帰っている。六月十四日「覚次取次ニ而阿部松軒頼ニ付金貳両盆迄取替阿蘭陀本貳冊預り置候事」とあり、覚次（学二）の取次で阿部松軒がオランダ本二冊を担保として金二両借金をしていることがわかる。学二は九月十四日大坂へ出立し、小倉をへて十月六日に大坂に到着する。十一月二八日出の書状では大坂船町潮田圓平塾に在るが、十二月二日から緒方洪庵方に入塾したことを知らせてきている。以後学二とは定期的に書状のやりとりが行われているが、嘉永七年以降記載はみられなくなる。大坂の辻学二からの手紙には、巨智部忠陽に宛てたもののほ

かに、伊藤（京請払役）・檜林（通詞）・阿部（蘭学者）・笠戸（医師）・峯（京宿老附筆者）宛の書状もみられる。

辻学二がまだ手代として務めていた嘉永三年十月二五日に下男として呼び寄せられたのが京都西陣黒門町近江屋利助（渡辺姓）である。その日の記録には、十月二十五日「一、京都留守宅分兼而申越候下男利助今日昼前到着、尤井筒屋治兵衛召連下り候事、京都西陣黒門町近江屋利助当戊五十二才 浄土宗 右寺往来并会所分往来持参ニ付町方へ早速為留置候事、右利助分箱入よふかん壺本土産として呉候事 右便分留守宅 菅吉 村瀬書状到来ス」と記載されている。利助は当初下男であったが、辻学二が巨智部方をはなれた嘉永四年二月からは手代利助としてその名が登場している。利助は安政三年八月二〇日に死去するが、それまで変わらず手代としての務めを果たしている。

以上のほか、用場で働く岩永恒太郎・原田吾市ら京宿老付の筆者とその見習いたちの名前も頻出し、貿易業務のほか、会所の祭りや家の行事・冠婚葬祭などにも参加している。

②五力所宿老たちとの交流

さて、長崎での公私にわたる生活の中で、もっとも重要なのが同業である江戸・堺・大坂と、長崎（地下）の宿老たちとの交流である。糸割符宿老は、江戸・大坂・京・堺の四力所と、長崎（地下）に大きく分かれ、毎月四力所から一名、長崎から一名月番が選ばれ、交代で廻状の伝達をはじめ、貿易業務にかかわる諸事一切を取り仕切ることになっていた。

表 1 長崎在番系割符五ヶ所宿老一覧

	弘化2	弘化3	弘化4	弘化5	嘉永2	嘉永3	嘉永4
江戸宿老	秋田久米蔵	秋田久米蔵・山際藤之助(7月～)	山際藤之助	山際藤之助	山際藤之助・秋田久米蔵(7月～)	秋田久米蔵	秋田久米蔵
堺宿老	酢屋久左衛門	酢屋久左衛門	酢屋久左衛門	酢屋久左衛門・高三内蔵太郎(6月～)	高三内蔵太郎	高三内蔵太郎・細屋又右衛門(7月～)	細屋又右衛門
大坂宿老	今井喜左衛門・伊勢村新九郎(7月～)	伊勢村新九郎・薩摩屋小伝次(8月～)	薩摩屋小伝次・安井清右衛門(7月～)	安井清右衛門	安井清右衛門・中村左源太(7月～)	中村左源太	中村左源太・井吉三郎兵衛(5月～)
京宿老	巨智部英三郎	巨智部英三郎	巨智部英三郎	巨智部英三郎	巨智部英三郎	巨智部英三郎	巨智部英三郎
長崎宿老頭取	濱武治兵衛	濱武治兵衛	濱武治兵衛	濱武治兵衛	濱武治兵衛	濱武治兵衛	濱武治兵衛
長崎宿老	林熊十郎	林熊十郎	林熊十郎	林熊十郎	林熊十郎	林熊十郎	林熊十郎
長崎宿老	森兼次郎	森兼次郎	森兼次郎	森兼次郎	森兼次郎	森兼次郎	森兼次郎
長崎宿老	徳見茂四郎	徳見茂四郎	徳見茂四郎	徳見茂四郎	徳見茂四郎	徳見茂四郎	徳見茂四郎
	嘉永5	嘉永6	嘉永7	安政2	安政3	安政4	
江戸宿老	秋田久米蔵・山際藤之助(8月～)	山際藤之助	山際藤之助	山際藤之助・秋田久米蔵(7月～)	秋田久米蔵	秋田久米蔵	
堺宿老	細屋又右衛門・酢屋久左衛門(3月～)	酢屋久左衛門	酢屋久左衛門・海部屋市左衛門(3月～)	海部屋市左衛門	海部屋市左衛門・細屋又右衛門(8月～)	細屋又右衛門	
大坂宿老	井吉三郎兵衛	井吉三郎兵衛	井吉三郎兵衛	井吉三郎兵衛	井吉三郎兵衛・永瀬幾代介(7月～)	永瀬幾代介	
京宿老	巨智部英三郎	巨智部英三郎	巨智部英三郎	巨智部英三郎	巨智部英三郎	巨智部英三郎	
長崎宿老頭取	濱武治兵衛	濱武治兵衛	濱武治兵衛	濱武治兵衛	濱武治兵衛	濱武治兵衛	
長崎宿老	林熊十郎	林熊十郎	林熊十郎	林熊十郎	林熊十郎	林熊十郎	
長崎宿老	森兼次郎	森兼次郎	森兼次郎	森兼次郎	森兼次郎	森兼次郎	
長崎宿老	徳見茂四郎	徳見茂四郎	徳見茂四郎	徳見茂四郎	徳見茂四郎	徳見茂四郎	

史料：各年次『要録』

表1は、弘化二年（一八四五）から安政四年（一八五七）までの『要録』からわかる五カ所宿老を一覧にしたものであるが、江戸宿老は、秋田久米蔵と山際藤之助がほぼ三年ごとに、堺宿老は、特に決まった任期はないようだが酢屋久左衛門・高三内蔵太郎・細屋又右衛門・海部屋市左衛門らが交代で務めている。大坂宿老も任期にきまりはなく、嘉永四年（一八五二）五月に着任した井吉三郎兵衛が安政三年まで五年務めた以外は二年ほどで交代しており、江戸・堺にくらべると、同じ期間中に今井喜左衛門・伊勢村新九郎・薩摩屋小伝次・安井清右衛門・中村左源太・井吉三郎兵衛・永瀬幾代介など多くの宿老が次々に交代していることがわかる。それに対して巨智部忠陽は弘化二年に着任して以来変わらず京宿老を勤めており、大坂・堺・江戸と比べると、より長崎に根づいた宿老であったことが窺え、長期にわたる記録を残し得た理由もそこにあると思われる。一方長崎の宿老たちは、頭取の濱武治兵衛・林熊十郎・森兼次郎・徳見茂四郎の四名は変わりなく、弘化四・五年には見習として宿老の子息である森隼太・濱武源之助などが新たに任命されている。因みに安政二年以降は、堺・江戸でも見習として秋田太作・海部屋乙次郎らの名前が加わっている。

これらの五カ所系割符宿老たちは、通常の貿易業務以外にも、非常に仲良く交流をおこなっていた。貿易業務にかかわる寄合はもちろんのこと、同業者の冠婚葬祭への出席、祭礼、茶

会、歌会、碁会、道具会などが頻繁に開催されている様子が、『要録』から読み取れる。宿老たちは、茶・和歌・囲碁・書画・骨董に通じた知識人であり且つ風流人たちであった。中でも、歌会は、中島広足といった宗匠を中心に、全国に広がる交流関係を形成していた。これについては次章でとりあげたい。いずれにしても、このような集まりの中で、江戸・大坂・堺・京・長崎に関する情報交換がなされていたことは、想像に難くない。また、既述のとおり巨智部忠陽の場合、四ヶ所宿老の中でも特に長崎に根付いた宿老であり、長崎宿老たちとの付き合いも一段と深く信頼もあった。

③ 京都の糸割符会所仲間との交流

江戸・堺・大坂とは異なり、巨智部忠陽は長崎に着任以降慶応二年に亡くなるまで京都に戻ることはなかったが、その間京都の糸割符会所とは、職務上定期的に書状や荷物のやりとりを行い、さかんに情報交換を行っている。またそれだけでなく、須賀屋直藏便・菅田屋由兵衛便といった定期便に合せて長崎奉行所や京都町奉行所などから依頼された書状のやり取りも請け負っており、今後これらの実態についても明らかにしていく必要があるが、ここでは、巨智部忠陽が、長崎と京都を結びつける太いパイプ役であったことを確認しておきたい。

④ 長崎町年寄との交流

長崎における交流関係の中で、長崎町年寄との関わりは重要であり、

幕末期長崎在番京宿老巨智部忠陽の交流関係

高橋作兵衛・後藤市之丞・薬師寺久左衛門・高木清左衛門・福田猶之進といった町年寄・会所調役の名前も頻出するが、もっぱら、御触の伝達や、長崎奉行着任・退任・病気の知らせ、諏訪大社祭礼時の役割分担、出勤要請、御褒美銀の配布、商人にかかわる通達など会所業務にかかわる廻状など、公的業務に関する事で、私的な交流の記録は弘化二年から安政四年の『要録』ではほとんど見当たらない。

⑤ 他国の諸藩士・学者・医者・村人との交流

他国の諸藩士・学者・医者・村人との交流について、現在判明している主な人物をあげてみたい。

丹後宮津藩士・・・安政二年六月から十二月にかけて、丹後宮津藩士戸祭加直・指田貢と「下部三人」が、長崎を訪れている。六月三日「一、京福井より五月六日出書状到来之事、然ル処小林金三郎より福井へ相頼候由二而、福井より添書致来ル、則左之通

丹後宮津家中 戸祭加直 指田貢 メ下部三人

右下部之内 森太郎 此仁は国々曆々と申事ニ御座候

右ハ西洋流砲術稽古之ため見へ候由、自然金銀等入用之節ハ取替遣し呉候様小林が被頼候旨福井より申来ル、右兩人今夕見へ候ニ付初而面会致し候事」とあることから、丹後宮津藩士戸祭加直・指田貢とその部下一行は、京都の小林金三郎の頼みで、京糸割符会所の福井氏（天保十一年京請払役福井栄次郎か）を介して紹介されてきたものである。その目的は長崎で西洋流砲術を学ぶためであり、その間の費用の立て替えを依頼

されていたことがわかる。六月八日「一、於御役所山本物次郎へ面会、宮津家中西洋炮術稽古之義頼置候事」とあるように、その入門先は、長崎の砲術家山本物次郎方であった。六月十日忠陽は兩名を連れて、山本物次郎方まで同行し、翌十一日には「一、宮津兩人山本物江今夕入門之事、忝人前銀壹枚、外二兩人分肴料金壹疋、一、右兩人分此方へ国産之由薄羽織地壹反到来之事」とあり、正式に入門し、忠陽にも謝礼の反物がもたらされている。また、八月十三日には、「一、戸祭・指田分京都宮津屋敷下山市左衛門行書状壹封頼越預り置候事」とあるなど、国許との書状のやり取りを依頼されている。十月十四日には戸祭加直ら数名が帰郷するにあたって金一〇両を貸し、十二月七日には金三〇両の立替証文をうけとっている。十二月十二日には「一、宮津藩中式人下男忝人帰郷ニ付左之通餞別差遣し候事、一、更紗風呂敷三ツツ 指田貢・森佐兵衛、一、手掛式筋 下男民蔵」とあり、およそ半年におよぶ砲術修行を終えている。二年後の安政四年二月二十一日二十三日の両日には、戸祭加直から書状が到来し、その後もやりとりがあったことがわかる。

このように、巨智部忠陽は、宮津藩士の砲術師範入門の手伝い、砲術修行中の費用の立て替え、藩との手紙のやりとり、などを行っていたことがわかる。

長州藩士・・・嘉永五年には、長州藩士で国学者の近藤芳樹が来訪している。三月十六日「一、長州萩藩中近藤芳樹先生当所ニ遊歴有之、当地中嶋廣足門人中分案内致迎陽亭ニおいて歌会有之、八ツ頃分罷出候事」とある。近藤芳樹が長崎に遊歴したときに、中嶋広足の門人たち

が、迎陽亭で歌会を催したことが記されている。近藤芳樹と中嶋広足との関係も髣髴とさせる。三月晦日には、近藤芳樹自ら、巨智部忠陽方を訪問したことも記されている。ひと月ほどの滞在で、四月十日には暇乞いのため、忠陽のほうから長州屋敷へ出かけてゆき、「同人著寄居歌談三冊」を入手している。四月十四日明日出立のため長州藩蔵屋敷に出かけ、近藤晋一郎芳樹と同行する佐甲織之助久要兩名に、餞別として更紗風呂敷地を三つ贈っている。

またこれ以外の長州との関係では、十一月十七日に「長州萩城下伊勢屋横丁青木周弼塾ニ而檜崎堅司様江返書今日差立候事」という記載がみられる。青木周弼^①は、周防国大島郡和田村の村医の出身で、長州藩医能美洞庵に医学を学び、江戸では坪井信道、宇田川榛斎に師事し、緒方洪庵らとともに学んだ蘭方医で、弟とともに長崎でシーボルトにも師事している。長州藩医となり医学校好生館設立にも尽力した蘭方医である。嘉永五年には長州で塾を開いており、檜崎堅司はそこで学んでいた者と思われる。巨智部忠陽との手紙のやり取りが確認できる。

雲州松江藩士・・・弘化四年から安政四年にかけて雲州宮次郡蔵・佐藤官次・加田才三・宮次理平治・佐藤官平・佐藤官蔵らの名前が登場するが、いずれも松江藩士である。『要録』によると、弘化四年には一月に長崎を出発して出雲国へ帰国、十一月に長崎到着、弘化五年六月出雲国へ帰国、十月出雲国へ帰国、嘉永五年三月長崎到着、八月長崎到着、十月面会、安政三年十一月長崎到着、十二月面会、安政四年九月出雲国へ帰国、など断続的に記録がみられ、これから、国許と長崎を頻繁に

往来し、手紙でのやりとりも含めて、巨智部方とも連絡をとっていたことが窺える。松江藩と長崎とのかかわりを考えると、俵物等の輸出にかかわる藩の御用としての往来であると考えられるが、滞在中は藩の御用だけでなく、弘化五年一月二四日「一、雲州佐藤氏旅宿小川町ニて夜分淨留理有之案内ニ付罷出候事」、正月二八日「一、立山俊定尼方へ佐藤氏其外案内致し昼後罷出候事」、二月三日「一、ヶ所鎮守初午祭礼：一、夜ル雲州佐藤氏其外入来一盃差出し候事」、安政三年十二月十六日「一、雲州屋敷江罷出佐藤官平久々ニ面会致し馳走ニ相成候事」、十二月十八日「一、昼後安禪寺佐藤官平渋谷倫作相招候事」などであるようにともに淨瑠璃を見にいき、酒を酌み交わすなど親しい間柄であった。また弘化四年十一月十八日「一、雲州佐藤官次一昨夜到着ニ付饜節巻連酒吞猪口巻差送り候」、嘉永五年八月十九日「一、雲州宮次理平治・佐藤官次江生肴一折ツツ着祝差送り候處左之通到来之事 青蠟燭式十本、小菊三ツ、メ右兩名にて」、安政三年十一月二一日「一、雲州佐藤官平が為土産左之通到来、一国产白蠟燭式拾本、一同 包揉紙式束メ」などの長崎到着祝いや土産のやり取り、弘化五年六月七日「一、雲州佐藤官次近々出立ニ付左之通為饒別差送り候事 いかふり更紗式ツ 田葉粉三ツメ」、安政四年九月二八日「一、雲州佐藤官平近々出立ニ付暇乞罷越候事、饒別として、一、碁盤毛せんぞ枚差贈候事」といった国許へ帰国するときに饒別を贈るなど、親しく接していたことがわかる。

武蔵国の住人・・・嘉永四年から安政四年にかけて、武蔵国から巨智部忠陽を訪ねてきた人物が数名いる。まず、嘉永四年十一月十一日に武

幕末期長崎在番京宿老巨智部忠陽の交流関係

州岩槻の清水玄晏とその弟の名が登場する。「一、京都東御奉行河野村馬守様御用人中山喜間太殿并清水藤右衛門が添書を以左之仁夕方入来面会酒飯出し候、尤医道稽古ニ見へ候也、武州岩槻住人 清水玄晏 実弟 右兩人昨十日長崎着被致候よし、戸町庄屋ニ津留之事」とある。これによると、十一日清水玄晏とその弟兩名は、京都東町奉行河野村馬守（通訓）の用人である中山喜間太と京都町年寄清水藤右衛門の添書をもって、巨智部方を訪問したことがわかる。清水玄晏兄弟が長崎に来た目的は医学の稽古の為であったことから、兩人が医師であったことがわかる。滞在は長くなく、十一月二十九日には、「清水玄庵兄弟明晦日出立之由ニ而、今夕見へヶ所ニ而止宿有之候、聊饒別之印迄ニ、一たばこ七巻、一メンデンツ少々、一唐線香壺把、中山喜間太殿、清水藤右衛門へ書状伝言いたし候事」とあることから、およそ二十日間ほどであった。武州岩槻の清水兄弟と京都町奉行所との関わりは不明であるが、京糸割府宿老と、京都町奉行所との間で緊密な連絡体制が整っていたことが窺える。清水玄晏（庵）とは、その後数年にわたり書状でのやりとりがあり、嘉永七年三月二四日には、「一、武州岩付清水玄晏添書ニ而左之兩人見へ候、万事玄晏が頼来候事、一江戸絵 七枚 玄晏が、一浅草海苔十枚、一江戸絵三枚、一すき油小一曲、一はみかき小一箱、武州岩付花積村斎藤陸左衛門・新方袋村山口利右衛門、右陸左衛門ハ玄晏妻兄之よし、利右衛門義ハ玄晏親類之よし」とあり、玄晏の紹介状をもつて武州岩槻の花積村斎藤陸左衛門・新方袋村山口利右衛門の兩名が訪れている。斎藤陸左衛門は玄晏の妻の兄、山口利右衛門は親類であり、玄

晏に頼まれた土産を持参している。花積村・新方袋村はいずれも幕領で、現在の春日部市域にあたっている。兩名は、二五日再び訪問したあと、二七日には別れを告げているので、数日の滞在で出立している。このとき巨智部忠陽から兩名に「更紗風呂敷一、形付金巾一切」をそれぞれに饒別として渡し、清水玄晏への書状も托している。六月十四日には「一、中嶋廣足先生へ罷出岩附才藤陸左衛門之金式朱差出し認物相頼置候、尤此方短尺十葉持参いたし預置候事」とあることから、この兩名の来訪の目的が中嶋広足への取次の依頼でもあったことが窺える。その二ヶ月後の閏七月十二日には「一、当三日歟出崎有之候武州岩附山口利右衛門より添書有之、江戸村松町鈴木重胤と申仁下崎有之 夕方見へ候、右山口利右衛門之錦絵五枚到来いたす、右築町大崎久右衛門方へ逗留之よし」とあり、今度は山口利右衛門の添書をもつて江戸の鈴木重胤^⑫が来訪していることがわかる。鈴木重胤は、淡路国津名郡仁井村の庄屋の家に生まれたが、十四才頃に大坂鴻池家に商業見習いに出てから国学を志し、大田隆正や平田篤胤没後門人となり、江戸に住んだ国学者である。晩年には尊王攘夷の志士とも交際があり、文久三年に自宅で暗殺されている人物である。十一月六日「一、濱武献上差立明後八日出立二付左之通伝言いたし候、蠟子巻双ツツ 清水・福井・前川・大音・村瀬・森川・神谷・井狩・留守宅・菅・田村メ 廣足宗匠たに尺四葉 武州岩月齋藤・山口へ 書状添」とあり、長崎宿老の一人濱武氏が献上差立のため京・江戸に向かうにあたって、京都の会所仲間や留守宅にあてて土産物と伝言とともに江戸岩槻の齋藤・山口兩名にあてて中嶋広足の

短尺四葉を書状を托していることがわかる。これは兩名が巨智部忠陽を介して三月に依頼していたものかもしれない。

安政四年閏五月十五日には、「一、今夜武州粕壁宿関根又八郎ト申仁見へ候、岩月齋藤山口之添書有之候、初面会致ス、一錦絵三枚、一たにさく三枚、齋藤陸左衛門・山口利右衛門之到来ス」とあり、また閏五月十六日「一、関根八郎倅又八郎明日出立二付齋藤山口へ返書認并唐人書四枚差贈り候事 武州日光道中粕壁宿関根八郎倅関根又八郎」とある。武州粕壁宿関根八郎倅又八郎も岩槻の齋藤・山口兩名の添書をもつて来訪している。

このように清水玄晏から始まり、その紹介で齋藤・山口が来崎し、その紹介で江戸の鈴木重胤や粕壁宿の住人関根又八郎が来訪するなど、武州と長崎を結ぶつながりがみえてくる。

書状のやりとりの他に、土産ものとして、江戸絵図や錦絵、唐人書などがやりとりされるのも、関東と長崎の情報交換の様子を良く示すものとして興味深い。

信州飯田の住人・・・嘉永三年から六年にかけて、信州飯田の住人水野無庵と同じく飯田住人関嶋年太郎の名前が頻出する。水無庵は六六歳で、京都町会所仲間の村瀬孫祐の従弟であり、二一歳の関嶋年太郎とともに村瀬の添書きをもつて嘉永三年二月十六日巨智部方を訪問している。兩名は、「豊前小倉表江用向有之当地禅林寺へ少々引合事二付茲許へ見物方見へ候事也」とあることから、小倉へ向かう途中たまたま見物がてら立寄ったものと思われる。巨智部忠陽から二〇両を借用し、三月

には長崎を離れているが、嘉永四年二月晦日「甲州製月の零一箱・ブドウ製菓子也、書状一通」が届くなど、その後も頻繁に手紙や進物のやりとりがある。年太郎の父関嶋退蔵は小倉に出かけることが多かったよう
で、小倉から書状や進物が届くこともあった。嘉永四年十二月二日には「一、信州飯田関嶋年太郎書状到来十月七日付也、同人父退蔵豊前小倉江用向有之城下開善寺へ滞留之由、右退蔵が奥州南部製カタクリ麵十抱并書状共十一月廿四日小倉出二而送り来候事」とある。また、巨智部忠陽からの手紙や進物のやりとりは、京都の糸割符会所仲間の村瀬を媒介としてなされていたことは、嘉永五年十一月五日「京都江子拾五番状差立候事 セアエイン半斤、ピストン五百入壱曲、同百人同メ壱箱、鰯子九双 但外二伊藤の七双入合壱箱、清水・福井・村瀬・森川・大音・菅吉・井狩・留守宅・信州飯田関嶋、但村瀬へ頼遣候、右何れも藤屋弥吉便ニ為登」とあることからわかる。

豊後日田 柏木辰五郎¹³・・・安政四年八月二二日「一、森方へ豊後肥田儒者柏木辰五郎と申仁見へ居候由ニ付此方伊藤同道ニ而罷出ル」、同年八月二八日「一、森氏并豊後肥田柏木辰五郎先生同道見へ候事」とある。柏木辰五郎は、弘化三年頃から安政五年にかけて、豊後国御領村で玉壺堂という私塾を開いていた儒者である。玉壺舎は、御領村儒者中村頤亭が宝暦十年に開設した私塾正倫舎を継承したものであった。長崎宿老の一人森氏と交流があり、森氏を介して知り合ったことがわかる。

江戸 伊東玄朴¹⁴・・・伊東玄朴については、弘化二年一月十二日「一今日見届相済候江戸行下谷御徒町伊藤玄朴江之手板初村玄助へ為持遣候

幕末期長崎在番京宿老巨智部忠陽の交流関係

事」の記載がある。初村は勝山町（長崎）の商人で、巨智部忠陽とは囲碁の仲間でもある。伊東玄朴は、弘化二年頃は佐賀藩鍋島直正の侍医の地位にあり、初村玄輔を介して巨智部忠陽との取引があったことがわかる。

江戸 成田与八郎¹⁵・・・嘉永五年四月九日「一、夕七ツ時分徳見江罷出候、釜掛り、江戸成田与八郎と申松尾流宗匠始而面会いたし候事」とある。松尾流は茶道の流派である。嘉永五年段階での松尾流宗匠は六代目松尾宗古（仰止斎）をさすと思われるが、詳細は明らかではない。宿老たちの集まりのひとつである茶会での出会いだったようである。

京都 堀内宗函¹⁶・・・堀内家は、代々著名な茶人・俳人を輩出する家柄である。堀内宗函は、堀内家五代目の宗完にあたる人物と思われる。はじめ堀内宗関と称し、隠居後鶴叟と称した。父親の跡を継いで摂津高槻藩主永井家の茶頭を勤めている。『要録』には、嘉永三年八月朔日「一、徳見が京堀内宗官老行為替頼まれ則左之通書付徳見へ遣し候、銀子ハ請取候也

覚

一、銀百三拾八匁八分
右者徳見茂四郎殿が御地堀内宗完殿江為登銀槌受取申候、右代り銀此書面着早々御面倒御渡可被下候、已上

嘉永三年戊戌八月

巨智部英三郎¹⁷

京都油小路竹屋町上ル糸割符会所 右之趣添状ニ菅吉迄頼遣候事」とあり、また安政二年十二月十日「一、京都が十一月十四日出小箱一つ下着ニ付解封之所、林・森・徳見行、堀内宗函が届物二付早速林江為持遣

し候事」との記述があり、為替の取組や届物など、長崎の宿老たちと京都の堀内宗函との交流を巨智部忠陽が仲介している内容が確認できる。

榎林健吉¹⁷・・榎林健吉は、天保三年大坂生まれで、豊後日出藩関勝之助の子であったが、榎林栄建が、弟宗建の娘常生を養女とし、建吉と婚姻させて、その跡を継がせたとされる。榎林栄建・宗建兄弟は、いずれもシーボルトに師事し、鍋島直正の命により、佐賀藩医として、種痘法の普及に尽力している。建吉はそんな栄建の跡を継いで医療に従事し、京都種痘館につとめたとされる。通詞の榎林家とは親戚関係にあたる。医師榎林建吉についての記述はそれほど多くはないが、嘉永二年五月二三日「紙包小箱沓榎林々京都草間列五郎行、紙包沓 此方由緒書之印紙五枚」とあり、榎林から京都町奉行与力草間列五郎宛¹⁸の荷物があつたこと。また嘉永六年一月七日京都から到着した子十二月十九日出拾番状とともに、草間列五郎から西村・榎林に兩名に宛てた書状が一通、七月八日にも、草間から榎林健吉宛書状が長崎に到着している。両者の関係は不明であるが、京都町奉行与力との頻繁なやりとりは興味深いものがある。

以上のほか、安芸国書生井上賢吉（嘉永三年十二月晦日・嘉永四年一月四日）、江州水口在文七（嘉永五十一年十一月十六日 同十九日）肥前塩田町古賀庄次郎（嘉永三年六月二十九日、嘉永五年十一月一三日）などの名前もみられる。

以上の面々は判明したほんの一部であるが、これらをみても巨智部忠陽が長崎において、諸国に広がる幅広い交流のかなめとしての役割を

担っていたことが確認できる。

以上①から⑤を通じて、長崎の京糸割符会所は、宿老・請払役・家代・手代が一家としてまとめて町乙名に把握されていたこと。手代は丹波国や京都などから選ばれ、手代の中には大坂へ蘭学（医学）修行に出ているものがあることが確認できた。また各会所を拠点として、五カ所の宿老たちや用場の仲間が業務上の寄合をはじめ、歌会・茶会・句会・道具会などを定期的に開催し、頻繁に交流をもち、情報を共有しあっていること。一方弘化二年から安政四年の『要録』を見る限り、長崎町年寄とは茶会・歌会などの私的交流の記録はあまりみられないこと。京宿老が、長崎と京都との間をつなぐパイプ役であったこと、さらに長崎と武州岩槻・粕壁の村人や江戸の学者を結びつける役割を担っていること。諸国からも、藩士・学者・医師・村人などが頻繁に巨智部忠陽方を来訪し、交流を深めていたことなどが確認できた。

2 別段風説書をめぐる交流関係

ここでは、巨智部忠陽の交友関係の内、オランダ別段風説書をはじめとする海外情報と深くかわりを持つことが既に明らかになっている①オランダ通詞、②長崎聞役、③熊本藩士国学者中島広足²¹に注目し、巨智部忠陽との関わりをみてゆきたい。

①オランダ通詞

『日録』・『要録』には、榎林栄三郎（天保十一・十二年）・榎林翠竹子

(天保十一年)・榎林孝太郎(弘化二・三年)・榎林栄七郎(弘化四年・嘉永二・三年・安政二年)・榎林栄左衛門(安政三・四年)・名村三次郎(天保十一年)・名村貞五郎(天保十一年・弘化二年)・元木昌左衛門(弘化二年)といったオランダ通詞や、呉碩三郎・穎川彦三郎(嘉永七)といった唐通事の氏名も多く登場し、通詞・通事たちが糸割符宿老と密接なかわりを以ていたことがわかる。唐通事については、嘉永五年巨智部忠陽らが転居した炉粕町の家主が呉碩三郎であり、また、唐船貿易において唐通事らの積荷物の翻訳の場に宿老たちが交代で立ち会うなど、公私ともに付き合いがあったことが確認できる。ただ『要録』の中の記載ではオランダ通詞たちが圧倒的に多い。

さて登場するオランダ通詞の中で、別段風説書を翻訳した通詞として署名があるのは、本木昌左衛門・名村貞五郎・榎林栄七郎の三名である。本木昌左衛門は、天保十二から嘉永三年までの十年間通詞目付として、名村貞五郎は弘化二年から嘉永三年まで通詞として、榎林栄七郎は、嘉永四年から安政四年(安政二年からは栄左衛門と改名)までいずれも長崎訳のほうに通詞として署名がみられる。⁽²³⁾

これらのオランダ通詞の中でも、榎林家の人々は、『日録』・『要録』の中に公私にわたる多くの記載がある。⁽²⁴⁾天保十一・十二年の『日録』に名前がみられる榎林栄三郎は、別家榎林氏三代目の栄三郎高久であると思われる。栄三郎高久は、寛政十二年生まれ、文化十四年に稽古通詞、文政六年小通詞末席、天保二年小通詞並、同八年小通詞助、同十年小通詞、同十二年に四二歳で没している。戒名が「清養院安養翠竹居士」と

いうことからみて榎林翠竹子は栄三郎と同一人物である。妻タネはオランダ通詞西吉右衛門の娘であった。⁽²⁵⁾片桐氏によると、『鷹見泉石日記』天保八年二月八日商館からの献上物上納のために出府した大通詞岩瀬弥十郎から「榎林栄左衛門父子より年頭披露状・銅板絵二枚」を受け取ったことが記されている。また、同日記天保九年二月十六日の条に、泉石を訪ねて来訪した通詞岩崎弥十郎が、同僚通詞からの預かり物として、「中山作三郎同卯三郎分唐曆一冊」、「榎林栄三郎分はるしや皮胴乱地并テリヤカ一罐」、「名村貞四郎分菩提樹実十斗」を泉石に渡している記事がみられる。⁽²⁷⁾また、泉石から通事たちに贈られたものとして、天保十年には「榎林栄三郎殿方へ同断(紙封箱)二・雁皮半切三百枚、但見分多葉粉入上分三百疋被下」⁽²⁸⁾天保十一年には「中山父子・岩瀬父子・榎林栄・名貞四郎・荒木蜂之進へ文晁父子・南溟父子画扇子三本ツツ遣」⁽²⁹⁾天保十二年二月十三日「榎林栄三郎分テリヤカ一罐到来、状ニ唐船五艘之内三艘入津、二艘行方不知候由、一艘ハ獵船、五嶋ニ而見懸候由・・・長尾へ榎林栄三郎分状巻、上江三百疋被下候御礼年始呈書・阿蘭陀瑪瑙玉一・糸切小切一本・阿蘭陀付木二箱上度来」⁽³⁰⁾天保十二年四月六日には泉石から「榎林栄三郎へ三百疋入一封遣」⁽³¹⁾を贈られており、情報の提供・贈答品や金品のやりとり・藩主への上呈品の手配など、親子で親交があったことを指摘している。⁽³²⁾さらに、老中・若年寄ら幕府高官からの注文輸入品の調査にもかかわっていたことが記されている。⁽³³⁾

では、このような幕府高官や古河藩家老鷹見泉石とつながりをもった

オランダ通詞と、巨智部忠陽はどのような関わりをもっていたのであろうか。『日録』・『要録』の中で榎林栄三郎に関する記載をひろってみると、天保十一年六月二十四日「一、昼後榎林栄三郎入来、八里江引合置候事」とあり、次に請込役として着任する八里賢五郎と榎林栄三郎を引き合わせている。また、榎林栄三郎は、遊び仲間であると同時に、商品の注文をうける関係でもあったようで、六月二十六日には「絹糸代金式分

分、楊弓箱矢九本入、女扇子式本代金壹朱、矢五本直代廿七匁五分、右ハ榎林栄三郎追々注文もの也、代金銀請取候事・・・一、京都江子拾三番状差立ニ相成ル、在京年寄中役方中筆者中へ暑氣見舞状三通差立ル、外ニ清水氏井狩菅吉郎九へ書状差立候事、尤榎林之絹糸代扇子代菅吉へ登ス、楊弓之代ハ銀子故書状ニ封中六ヶ敷此方持登ニ付預り置、大銀故あぶない物じゃと自ら云」とあり、栄三郎が絹糸・矢入りの楊弓箱・女扇子・矢五本を注文し、代金は為替で送り、代銀は忠陽方で持参するので預ったという記載がみられる。また、六月二十九日「榎林分同割(子式番割)八番珊瑚玉壹ツ取代銀八匁式分爲持遣、請取書アリ」とあり、落札した珊瑚玉を八匁式分で遣わしている。こうして忠陽を介して入手した品物が贈り物として活用されることもあったのであろう。

『日録』の最後には、この間の収支が記載され、翌年天保十二年三月十二日「入式匁 扇子代 子十二月取替戻、三月二三日「入金壹分式朱 榎林分取替戻り」、四月「一、拾匁五分 榎林栄三郎取替長閑矢代一、四匁五分 同人取替紙包箱下し賃」などと、支払いの記録もある。

ところで、注文品にもみられる楊弓は、このころ共通の趣味であった

ようで、六月二十八日「一、榎林・亀田屋新右衛門入来、楊弓ヲ引」、六月二十九日「如柳子・翠竹子・此方楊弓引」、七月十日「一、楊弓射引書式冊物参匁位 望月ニ而尋ル」などの記載がみられ、仲間とともに矢場通いをしていたようである。

天保十一年帰京時の錢別は、「帰京錢別到来覚」の中にまとめて記載されているが、榎林栄三郎からは「一、琉球盆一枚、一、肥後上田焼茶出し壹、一、藁紙壹帖、但拾式枚有 模様文字之すかし有、一、テリヤアカ壺罐、一、舶来蔓掛瓶壹、外ニ那子一 石筆壹本 持参ニて到来スル也、尤六月廿七日夜此方伯母富江自宅ニ而離盃有」とあり、さまざまな錢別品を受け取っており、親しさが窺える。また、最後に覚として、

〔袋町 榎林栄三郎殿

一、藤組茶蔵絵図面之通手間計金貳百疋か、無余義次第ナラハ金二朱計はり込、尤藤量目壹貫四百匁、数六十三本請取置、藤ハ不残細工人へ差遣駢と見請置候、茶蔵之通ニ為致手間計之直段也、組藤之中曲尺式尺位一、宇野行書状壺

一、望月重五郎へ矢五本直し代銀貳十七匁五分預置
一、如図掛致し候弦四五掛下ス事(図あり)

一、銀かなぐ楊弓古物一挺 但七寸五分八寸引價三分位

一、茶壺斤二付拾五匁分廿五匁位迄之所折々下ス

一、勝田長閑矢一箱古矢七本有、一本新規捲羽染有之ヲ此節白羽ニ仕替

候事

一、扇子平骨式本刺替へ、但地紙一本物位、但白地二式分金 骨三本預

ル、扇子三本十二月三日出合下ス

一、烏丸光祖卿 何之頃の御人歟

一、楊弓本射場間数何ほど 弓繩ト云物有り

一、九月十六日に届ル 湯原安左衛門行坂本周昂書状式通、大坂届也

一、干湯ば」との記載がある。ここでは十二ヶ條にわたって、榊林榮三郎関係の覚書が記されている。まず藤組の茶蔵の建設について記され、細工に使用される藤の購入について記している。藤については、天保十

一年八月二十五日「一、八里氏へ相頼置候分、一榊林之藤船便合為登、一、紅毛紙壹枚序ニ為登」との記載がみられる。三・四・五・七・十ヶ条目は、楊弓に関する事で、矢の直し、羽の染め替えなどが依頼されていることがわかる。また扇子の骨の差替えなども依頼している。このほか、飯塚・宇野・湯原・坂本宛の手紙の届を依頼され、九月十六日大坂到着後すぐに届けている。共通の趣味もあり、日常的に親しく交流していたことがわかる。

三代目榮三郎の息子が孝太郎で、別家榊林氏四代目榮左衛門高明である。「榮七郎」と名乗っていた時期もあり、『要録』では、弘化三年に孝太郎・弘化四年から安政二年に榮七郎・安政三年から四年に榮左衛門の名がみられるが、これらは同一人物であろう。履歴³⁴によると、天保八年十月稽古通詞、同十三年三月父の跡を継ぎ、弘化三年正月小通詞末席、同四年五月廿九日小通詞並、嘉永六年九月小通詞助、同年ロシア船渡来の節に通弁方を務め、安政二年四月小通詞過人、安政四年十月大通詞となり、伝習稽古に参加したことで金三千二百疋を賜り、安政六（万延

幕末期長崎在番京宿老巨智部忠陽の交流関係

元）年四月長崎奉行支配調役下役格となっている。³⁵ 嘉永四年には、編纂に従事したエゲレス語辞書和解第一冊が脱稿され、西成量（吉兵衛）・森山憲直（榮之助）・名村元度（五郎八）らとともに序文を作成している。安政五年七月には西吉兵衛とともに英語伝習所の頭取に就任している。万延元年十一月二日三十一歳で病没している。妻ハルは、元オランダ小通詞並堀儀左衛門の娘で安政三年七月二日二四才でなくなっている。³⁶

榊林榮七郎については、藩の聞役への情報提供など「御内用通詞」御出入通詞」としての活動が既に明らかにされており、嘉永七年熊本藩から五人扶持をうけていたことが明らかにされているが、佐賀藩との関わりもあつたことが、佐賀藩主鍋島直正の側近であつた佐賀藩士本島藤太夫（松蔭）の日記『松乃落葉』³⁷から知られる。これによると、嘉永七年七月二三日には、オランダから長崎に到着したシンビン号乗船のため長崎に来た佐賀藩から、長崎地役人のひとりとして「交肴一折ツツ」をいただいた記事や、八月シンビン号に乗船する際に、榊林榮左衛門と本木昌蔵らが通訳を務めたこと、安政二年四月十二日には、「一、十二日通詞榊林榮左衛門より別段風説書左之通 魯西亞皇帝薨シテ其弟軍艦四百艘ノ元帥トナリ、英仏ノ軍ト大ニ戦フ事三度、互ニ勝敗アリ、魯軍三万人ト云。其後英仏二軍「カムシカット」ヲ囲ミ攻ルニ、魯大軍ヲ発シ、大戦英仏利アラス、敗軍ス。抑英仏二国ト兵革ニ及フ事、魯「トルコ」ヲ討ツ事甚不義也。因テ二国兵ヲ合セテ魯ノ不義ヲ計シ也。今英仏ノ軍艦上海ニ在ルモノヲ合セテ再ヒ魯ヲ討ツヲ謀リ、「オ、ステンレイキ」

モ亦此二同意シ、軍艦ヲ発シテ其戦ヲ助シカ為其期ヲ約シ、日本近海ニ艦隊ヲ揃エテ魯ニ向ントス。是ニヨリ今度渡来ノ仏船帰帆ヲ急クハ、前ノ期ニ後レザルタメニ当港ヲ出テ、日本ニテ初テ彼等カ為ニ開キタル箱館港ニ到リ、会戦ノ地ニ趣ント欲ル也。」³⁹⁾とあり、ロシア皇帝の死、ロシア対英仏との戦争、トルコ・オーストラリアの動向などヨーロッパ情勢について知らせているが、ロシア皇帝の死は安政二年七月の別段風説書に記されており、内容は安政元年と安政二年の別段風説書の内容が混在している。事情は不明だが、すでに情報として入っていたのを伝えたのかもしれない。また、安政二年の別段風説書の「魯西亞国・都児格国・エゲイプテ国」⁴⁰⁾の中の記載を要約したものであるが、実際には戦況についての記述はもっと詳細であり、日本との関わりについて記されている部分は見当たらないので、後半部分は個人の見解も混入しているように見受けられる。いずれにしても、栄七郎を通じて、佐賀藩に別段風説書の内容が伝えられていたことは確認でき、ロシア・ヨーロッパ諸国での戦況が日本にも大きな影響を与えていることを認識している点は、注目できるだろう。また、「通詞榎林栄左衛門より英船申口和解差出候事」とあり、安政二年伊豆で遭難したロシア船ディアナ号について、七月十日に入津したイギリス船からの情報も伝えている。⁴¹⁾七月二三日には、長崎御用に必要な蘭書が届かず、栄左衛門に相談の上、出島から取り寄せている。⁴²⁾翌二四日藩主が長崎に到着し、御備場などを見学、翌日オランダ蒸気船に乗り込み、オランダ士官・船将らが出迎えて案内しているが、そのときの通詞は榎林栄左衛門・本木昌造・西吉十郎であつ

た。⁴³⁾安政四年巳六月六日長崎からオランダ商船三艘入津の知らせが来て、「内一艘ハ小形之スクーネル船ニ而、一昨年乗渡候船ニ者無之候得共、船頭ハ其節乗渡候者ニ而、此節ハ右船此御方江御買上ニ差出候積ニ而乗渡候趣、内々かひたん迄申出候趣、通詞岩瀬弥七郎・榎林栄左衛門より聞番迄申聞候由」とあり、スクーネル船買付けについて、カヒタン話の内容を佐賀藩の「聞番」に伝えていたことがわかる。⁴⁴⁾また、安政五年正月十九日「伝習方課業式日」によると、通詞受持の中で、榎林栄左衛門は「操卒学校」の担当としてその名が見えている。⁴⁵⁾以上みたように、栄左衛門は佐賀藩とも密接に関わりをもっていた。

では、巨智部忠陽とのかかわりはどうか。巨智部忠陽が長崎在番京宿老として再び長崎の地に赴いた弘化二年以降は、榎林栄三郎の息子である榎林孝太郎が多く登場する。既述の通り、孝太郎は昇進するに従って栄七郎・栄左衛門と改名している。巨智部忠陽と孝太郎との交流は日常的な私的な付き合いの記載が多く、例えば弘化二年七月二九日孝太郎が中町へ転居したときに「西陣織三巾風呂敷」を進物として送ったり、榎林らとともに楊弓の催しに出かけたり、庚申侍や諏訪神社祭礼・法師会に同行するなど、お互いに誘いあつてでかける遊び仲間でもあったようだ。また嘉永三年八月十日「一、榎林栄七郎方、当月五日晝女子出性ニ付肴一折差贈候事」とあるように子供の誕生祝いを贈ったり、安政三年七月四日「一、中町榎林栄左衛門妻はる女昨夜死去、今晚為知来候ニ付悔ニ罷越候、当辰二十五才之よし」、安政四年三月十二日「一、榎林栄左衛門方祖母此程死去ニ付為香奠晒葛一箱線香五束差贈候事」とあるな

ど妻・祖母の死に際しても、お悔みを贈るなど、冠婚葬祭の付き合いは欠かせない存在であった。

また、弘化三年正月晦日「一、檜林麻上下二而見へ候事、小通詞末席 檜林孝太郎」、弘化四年五月二九日「一、檜林栄七郎小通詞並被仰付候よし見へ候事」、安政二年五月三日「一、檜林栄七郎此程小通詞へ昇進ニ付見へ候、今日祝として罷越候、生看一折差送り候処、同所も来ル」、安政四年十月三日「一、檜林栄左衛門昨二日大通詞被仰付候由ニ付白木樽看差贈候処、同様答札来候、歎ニ罷越候事」と、栄七郎が昇進の度に巨智部方に挨拶に出かけてきている様子や、巨智部忠陽も悦んでいる様子がわかる。

弘化四年には、一月十三日「一、檜林栄七郎十五日発足江戸表江紅毛献上物一同被参候ニ付、為錢別たばこ拾玉進物いたし候事」、一月十四日「一、檜林栄七郎方江も暇乞罷出候事」とあり、江戸参府に随行したことや、四月二六日「一、檜林栄七郎江戸より帰郷ニ付夜分悦ニ罷出候処馳走ニ相成候事」、四月二八日「一、檜林氏一昨日帰郷ニ付歎として肴一折差遣し候事」、五月七日「一、檜林栄七郎殿江江戸土産として式本入扇子一箱、傘壹本、うちわ壹本、メ 右之通到来之事」とあるなど、三ヶ月後江戸から無事に帰宅し、江戸土産を持参した様子も記されている。栄七郎はこの江戸から帰宅して一ヶ月後に小通詞並に昇進した。この他、嘉永五年十二月九日「一、ヒストン代銀拾式匁檜林へ持参相渡置候、上方取替也」、嘉永七年一月二九日「一、京都西浅野中務少輔様御頼相成候箇香酒壺硝子檜林が為持来候ニ付、代金壹歩取替置候

事」とあり、「ヒストン」や、京都西町奉行浅野中務少輔から依頼された酒を、檜林を介して入手し、その代金を立て替えて支払っている記事がある。オランダ通詞はめずらしい西洋の品物を入手できる立場にあり、宿老たちも通詞たちのつてで入手していたことがわかる。

檜林家ほど多くはないが、名村三次郎・貞五郎⁴⁶の名も登場している。名村三次郎は、オランダ通詞名村家別家六代目元武で、『ドウフ・ハルマ』編者の一人で、文化元年レザノフの通訳を務めた。文化二年小通詞末席、文政二年小通詞並、文政六年シーボルトとも関わりがあった。文政十二年から天保三年まで江戸天文台に勤務し七月帰郷⁴⁷。天保七年小通詞助・同八年小通詞・天保十二年参府休年出府通詞となった⁴⁸。片桐氏によると『鷹見泉石日記』には、江戸に出府した天保十二年三月十日岩瀬父子とともに「名村三次郎菖蒲酒二瓶到来」とあるように、岩瀬父子に頼んで泉石のもとに呈上品を贈り、その十日後に「名村三次郎江鯛一遣」とあるように返礼の品を送っていること。三月二八日「長崎名村三次郎・荒木熊八参候筈之処、熊八ハ断、岩瀬弥七郎同道三次郎参候、コーヒー豆一袋・扇子二持参・吸物ニ酒肴三支度出」あり、江戸にいる間、手土産をもつて実際に泉石のもとを訪問していることもわかる⁴⁹。

シーボルトや鷹見泉石とも関わりのあった名村三次郎について、『日録』には、天保十一年七月十日に「一、名村三次郎江持出し銀才足申遣左之通、九十五匁九分五厘八毛 旧冬宇野合釣合高、百疋 短尺代此方へ取ル分、式分五厘三毛、素焼手遊式拾代同断 メ」とあり、また、同年八月二五日「一、名村たにさく代江ローユエン三瓶給取候事」など

の記載がみられる。

名村貞五郎は三次郎の養子で、オランダ通詞名村家氏別家七代目元義で、享和二年生まれ。文政五年稽古通詞、文政十一年小通詞末席、天保三年から六年まで天文台勤務、天保八年小通詞並、天保十二年家督を継承。弘化元年小通詞助、嘉永元年ラナ・マクドナルド通訳、安政二年大通詞過人、安政四年大通詞・長崎海軍伝習所勤務、嘉永二年年番小通詞、嘉永四・安政元（八右衛門）・安政三・安政四年参府休年出府通詞を務めた。⁵⁰ 嘉永四年以降は、八右衛門と称した。『鷹見泉石日記』には天保十二年二月十五日「名村貞五郎（阿）沙蘭陀附木、荒木ニ而摺り候へハ、直ニ火出候もの并火打石到来」の記載がみられる。⁵¹ 泉石にオランダ渡りの珍品を提供している様子がわかる。

『日録』では、天保十一年八月二六日「名村貞五郎宇野引合之銀子才足手紙共森川氏へ相頼置候事」とある。宇野氏は京都の町年寄ではないかと思われる。詳細は不明であるが、銀子催促の手紙を当時の長崎在番京宿老森川氏に依頼しており、なんらかの取引があったものと思われる。また、『要録』では、弘化二年一月二四日「名村（宇）野行書状巻」、同五月二二日「水野淳介行名村貞五郎紙包箱物二つ」とあり、いずれも、上京する商人・知人に託して届けさせている。

この他、弘化二年二月十日「外浦町元木昌左衛門蘭三ツ案内有之、同役中濱武より誘引ニ付罷り出」とある。ここに登場する元木昌左衛門は、オランダ通詞本木昌左衛門久美であろう。

以上みたように、オランダ通詞と宿老の間には公私ともに密接ななか

わりがあることがわかる。その中でも檜林家と京宿老との関係はその記載量の多さからみても、特に親しかったといえるだろう。

②長崎聞役

『要録』の中には、薩摩藩長崎聞役奥四郎をはじめとして同藩聞役大迫源七・染川喜三左衛門、小倉藩聞役山内吉左衛門（矢柄）、五島藩聞役紙上内臓の名がみられる。

長崎聞役は「聞番」「長崎留守居」などとも呼ばれ、長崎に蔵屋敷を設けた九州の十四藩が、長崎奉行所との交渉や、別段風説書など海外の機密情報入手することを目的として派遣した役人たちであり、その実態についても少しずつ明らかにされつつある。⁵²

別段風説書の写本の中には、情報提供者として薩摩藩聞役奥四郎の名がよく登場し。⁵³ 例えば、『嘉永雜録』⁵⁴ をみると、天保十三年別段風説書の写に次いでつぎのような記載がみられる。⁵⁵

「長崎御附人奥四郎（宇）差出候書付

一、此節入津之阿蘭陀人（阿）於唐國エゲレス人共戦争一件二付、当御役所（宇）御尋問有之、別段風説書を以極内申出候書面和解高嶋四郎太夫江内々頼入写取申候二付、早速御国許江も差上越置申候、・・・然處右一件（宇）御役所之儀ハ極々御秘密ニ而、一切他へ不相洩様掛役人共へ厳敷被申附置、和解下書込も被取揚候旨、高嶋（宇）承得申候、・・・右一件二付此節御内用有之益満新十郎へ出崎被仰付、去月十八日着崎仕候間、早速（宇）尚又申談、高嶋ハ勿論御内用頼通詞中山作三郎身へ何敷頼入等も仕事二御

座候・・・八月九日 奥四郎」とある。これは薩摩藩に別段風説書の写しを送ったときの書付の一部であるが、これによると奥四郎は、長崎町年寄高嶋四郎太夫からアヘン戦争情報である天保十三年別段風説書入手し、国許に送っていること、高嶋からは他へ漏らさないように釘をさされていることを伝えている。また、「御内用頼通詞中山作三郎」の名も見え、薩摩藩の御内用頼通詞の存在も明らかである。

また、『石室秘稿』⁵⁶には、弘化五年別段風説書の後に、「別紙和蘭人風説書御出入通詞西・檣林^{林方}方ヨリ極内差出申候、右ケ條ノ内ニ琉球滞在ノ異国人ヲ琉人共殺害致候趣之風説書ヲ異国ニテ取沙汰有之趣ニテ、風説之事故取止メ候事ニ者無之旨ニ者御座候得共、当時柄公辺ニモ異国一件分テ御心配申之御故、御老中辺ヨリ御奉行所へ厚ク聞繕方御内達ニモ相成候由ニテ、御奉行所ヨリハ国許へモ内々御シラへ之御手モ付候由ニモ極内々御出入通詞共ヨリ申出候ニ付、別紙取添早々御届申上候、尤此風説書ハ極内者勿論之事ニ御座候、此段宜敷御披露可給候、以上

八月十九日

長崎在勤

奥四郎

御家老座 奥掛書役衆」とあり、「御出入通詞西・檣林」から弘化三年別段風説書を極秘に入手し、藩に提出していること、さらに琉球で異国人が殺害された事件について触れ、外国でもニュースになり、幕府から薩摩藩へも取調があるかもしれないという極秘情報を「御出入通詞共」から入手し、家老宛てに知らせていることがわかる。これらの事例をみて、既に指摘されていることではあるが、改めて通詞と聞役の密

接な関係がわかる史料である。

また、『西變紀聞』⁵⁷に、次のような史料がみられる。

「△薩摩聞役より町年寄後藤氏へ被差出候書面写

薩摩聞役より別紙渡来ニ付為御承知差出申候、御順達留分御返却被成候、以上

六月九日

後藤市之丞

向々様

後藤市之丞様

奥 四郎

以手紙啓上仕候、弥御堅勝被成御勤珍重奉存候、然ハ○琉球之内徳之嶋へ当正月廿四日同二月六日アメリカ船二艘漂来、任望野菜等差遣候処、両艘とも出帆致し候、同三月〇七日⁺那覇沖へアメリカ船壹艘渡来、食糧相與候処廿一日出帆同四月朔日英国船壹艘渡来、薪水等差贈り候処、同六日出帆致し候、右四艘とも滞船中取締向堅固取計候旨、琉球より申越候ニ而、別紙之通大屋^{本ノマ}遠江守様へ御國許家老共^{是の下文誤不分明}共⁵⁸此段為御知可得貴意如此御座候、依之ご一統へハ貴所様分御通達被下度御頼申上候、以上」

この史料は、五月二八日付薩摩聞役奥四郎から長崎町年寄（会所調役）後藤市之丞に宛てた書状の写を、六月九日市之丞から「向々様」に宛てて差し出したものの写であるが、その内容は、正月から四月までのアメリカ船の来航と徳之島上陸に関する詳細な琉球情勢であった。奥四郎は、国許家老から長崎奉行大屋遠江守に宛てた情報について、その内

容を町年寄（会所調役）後藤市之丞にも知らせ、「御一統」へも通達するように依頼したものである。この「御一統」「向々様」が誰をさしているのかは不明だが、これを見ると、琉球に関するかなり詳細な情報、長崎町年寄たちには伝わっていたこと、薩摩藩は聞役を介して町年寄から別段風説書をはじめとする海外情報入手するだけでなく、薩摩藩側からも町年寄・長崎奉行に対して詳細な琉球情報・海外情報を提供するという相互関係にあったことがわかる。

以上の事例から、長崎聞役とオランダ通詞・町年寄（会所調役）との密接なつながりがみてとれる。それでは、糸割符宿老巨智部忠陽との関わりはどうか。

『要録』に長崎聞役との関係が登場するのは、弘化三年十月からで、弘化二年には見られない。まず弘化三年十月十一日「一、小倉藩江初而罷越候、尤本玄関より上り座敷江通り聞役江面会之事、帰り掛玄関迄聞役被送候、聞役山内吉左衛門 用達酒美正助」とあり、この日初めて小倉藩聞役山内吉左衛門と接触したことが記されている。その後同年十月二〇日には「一、小倉聞役山内吉左衛門方へ肴一折差送り候事」、弘化四年四月十五日「一、小倉聞役山内矢柄殿見へ候得共、新地出役中二付面会不致候事」、九月廿九日「一森氏二而緋拾ヲ分買ひ小倉屋敷山内へ遣し候事」、十月十七日「一、小倉聞役山内矢柄近々帰郷ニ付為錢別丹通老枚差遣し候事」、弘化五年二月十七日「小倉山内矢柄殿へ返書差立、用場合中原屋迄届方頼遣候」とあり、藩や聞役との交流が確認できるが、記載量はそれほど多くない。また、五島藩聞役についても、嘉永三

年九月二日「一、原田吾市人数揃俄に案内有之、伊藤同道罷出候、相客五島聞役紙上内蔵同内役壱人也、尤裏の亭ニ別席也」、十月二日「一、五島聞役紙上氏々唐方壱番白砂糖壱丸代金四両請取、過上二而六十四文為持遣候事」とあり、聞役紙上内蔵との交流や、白砂糖の販売が確認できるが、記載量はさらに少ない。それに対して薩摩藩聞役の記載量は格段に多く、特別な関わりをもっていたことがわかる。

薩摩藩聞役が最初に登場するのは弘化三年十月二四日のことで、小倉藩聞役とほぼ同じ時期であるといえる。弘化三年十月二四日の日記をみると、

「一、堺此方今薩州錫中次三つツ、森取次を以聞役奥四郎殿へ相頼候処、出来之上大小三つツ、至来候二付、堺酢屋相談之上兩人今奥氏へ壱番新織袴地壱下、弁柄さらさ壱反差送り候事」とあり、堺ヶ所宿老と巨智部忠陽が、茶道具である「薩州錫中次」を三つづつ、長崎宿老森氏の取次で、薩摩藩聞役奥四郎に注文し、それが出来上がってきたので、二人で相談して奥氏へ袴地と弁柄更紗一反を御礼に贈った、というものである。その後十一月十四日には、「一、薩州蔵屋敷爪鼈甲商人見せ正五ツ時出勤、同町乙名居所五ヶ所仲宿ニ致呉候様薩州屋敷より月番へ懸合有之、四ツ時同所へ罷出、俵使御出之上仕役場へ罷出詰切之事但、昼弁当右仲宿ニて相弁し候也、夫より又々元席へ罷出候事則図面凡左之通り

（図面略ス）

右之通り也、○印所江座り俵使へ礼ヲ致し、町年寄同行御役所ニも一礼

を致座ニ付候也、一同役々相揃候上薩州聞役奥四郎挨拶ニ見へ候、夫より仕役相始ル、終日詰切也、七ツ時頃引取候也」とあり、南馬町乙名の居所を会場として、薩州蔵屋敷の爪鼈甲の商人見せが開かれ、町年寄と同行し、会場には聞役奥四郎もいて挨拶にきたとある。この日の日記には、当日の会場の図面まで記載されており、巨智部忠陽にとっては爪鼈甲の取引はおそらくこの日が最初だったのであろう。翌弘化四年三月二日には「一、薩摩屋敷聞役奥四郎同役中案内有之、八ツ半頃分一同罷出候事」、三月二十八日「一、右帰路薩摩屋敷罷出去ル廿二日馳走ニ相成候挨拶罷越候得共聞役奥四郎留守中ニ付面会不致候事」とあり、薩摩屋敷での接待もあつたことがわかる。十二月十二日には、

「一、薩州蔵屋敷分左之通到来之事

銀子 七枚

目録奉書紙壹枚

巻のし付

銀子も奉書紙包紅白水引

巨智部英三郎様 奥四郎

以手紙致啓上候、弥御堅固被成、御勤珍重存候、然ハ当秋琉球産物仕役ニ付而者、段々預御世話忝存候、右之趣国許江申越候處、為御挨拶別紙目録之通致進覧之候様申来候間、御受納可被下候、以上」とあり、薩摩藩からは琉球産物取扱に対する謝礼銀が届いている。この銀子七枚は、この後数年にわたり巨智部忠陽に支払われている。一方弘化五年二月七日には、「一、三銀増方願一条ニ付、夜薩州聞役奥四郎方へ巨智部・安井・濱武罷越致面会候、馳走ニ相成候事」とあり、「三銀増方願一条」

について相談するため、巨智部・安井・濱武ら宿老三名が奥四郎に面会し馳走になったとある。薩摩屋敷への出入りは、四月二十日にもみられる。嘉永二年十二月二十四日には「一、薩州屋敷江高三同道罷出候事、但琉球産物仕役ニ付而五カ所惣代中心付銀被下置候様内々森分頼談有之候ニ付、表向今日頼ニ罷出候事」とあり、琉球産物仕役については、五カ所惣代全員に「心付銀」をくださるよう、長崎宿老森を通じて内々に頼んでいたのを、この日改めて正式に願い出ている。嘉永三年には薩摩藩の琉球産物売捌御免の期限を翌年迎えるにあたり、引き続き子（嘉永五年）から辰（安政三年）まで許可があり、これまでどおり継続することが決まっている。

嘉永四年三月十五日には、「一、薩州松平大隅守殿御隠居被為蒙仰、修理大夫殿御家督被為蒙仰、薩摩守殿と奉称候旨聞役奥四郎分為知来候ニ付、為恐悦麻上下着蔵屋敷へ罷出聞役江面会之事」とあり、薩摩藩主が斉興から斉彬へと代替わりをしたことを聞役奥四郎が知らせている。その影響なのか、九月二十四日に奥四郎は国許に帰り、十一月四日大迫源七が奥の後任（代理）として着任している。十一月四日「一、薩州聞役大迫源七分於千代宿同役中案内有之夕七ツ時分罷出候事」、十一月七日「一、去ル四日馳走ニ相成候挨拶薩州屋敷へ罷出候事」とあり、その後は、十二月二十三日「一、薩州候分琉球産物仕役御挨拶として白銀七枚例之通聞役手紙相添到来之事」、十二月廿五日「一、早天薩州蔵屋敷荷渡出勤、但今日にて皆済之事」とあつて、従来どおりに動いている。

嘉永五年になると、挨拶銀の支払に変化がみられる。幕府との契約更

新にあたり、宿老への挨拶銀が見直され、春と暮の二回になっている。三月十四日に「一、薩州蔵屋敷左之通目録到来之事 巨智部英三郎様 大迫源七 以手紙致啓上候、然ハ旧臘唐反布仕役ニ付而者段々預御世話可心存候、右之趣国許江申越候処、為御挨拶別紙目録之通進之候様申来候間御落手可被下候、此旨為可得其意如此御座候、已上 三月十九日 銀子三枚 卷のし目録添」、九月十四日「一、薩州候々当春仕役ニ付而御挨拶として銀子三枚被下置候旨聞役大迫源七手紙添為持来候事」とあり、大迫源七から「唐反布」の仕役で世話になった札銀として銀子三枚が贈られている。また十二月十日「一、薩州琉球産物仕役御挨拶として銀七枚聞役大迫源七手紙添為持来候事」ともあり、以上から、例年の銀七枚に加えて、春にも銀子三枚を挨拶銀として支払っていることがわかる。

奥四郎とは、その後も交流があったようで、嘉永六年三月に長崎に来た折には、巨智部忠陽を訪問し、巨智部忠陽方からも挨拶に出かけている。三月晦日「一、薩州奥四郎先頃出崎有之此方へも先日見へ候二付、新地引取掛挨拶ニ罷出候事」、九月六日には、「一、薩摩聞役奥四郎同道被罷出、昨日御役所御届相済候由 松平薩摩守内染川喜三左衛門」とあり、奥四郎が大迫源七にかわる聞役として染川喜三左衛門を紹介している。また、同年の挨拶銀についても、九月二十九日「一、薩州様々当春琉球産物仕役ニ付為御挨拶銀七枚被下候事 但聞役奥四郎手紙相添来候」とあることから、長崎では、薩摩藩聞役の中でも奥四郎が中心となつて活動をしていたことがわかり、宿老たちとのつながりも強かった

ものと思われる。奥四郎は、嘉永七年正月十一日「一、薩州聞役奥四郎近々帰国之よし、此程暇乞見へ候二付、今日此方々も罷出候事」とあるのが最後で、以降は聞役染川喜三衛門が引き継いでいるが、特別な付き合ひの記載はみられない。

奥四郎とは、薩摩藩の琉球産物の長崎会所での仕役にかかわる公的な商いにもとづく関係が中心であったが、贈物の交換や薩摩藩邸での接待、薩摩藩主の交替を知らせるなど、私的な交流もみられる。別段風説書の翻訳を行うオランダ通詞とも親しい巨智部忠陽との間で、当時の琉球情報や海外情報が話題になることはありうることである。

③国学者中島広足

中島広足（寛政四年三月五日〜文久四年一月二日）は、熊本藩士で国学者・歌人である。家は代々肥後細川家に仕え、知行は二〇〇石であった。享和二年に父中島惟規の跡を継ぎ、御番方、御小姓役などを務め、文化十三年二四才で家督を妹婿に譲つて隠居し、国学に専念。三〇才の頃から長崎に移り住み、以後三十余年国学・和歌を講じ、多くの門弟を教えた。安政四年以降は大坂に住み、文久元年熊本に戻り、藩校時習館の国学師範に任ぜられた。元治元年正月七三才に没した。当時から国学の代表的大家であり、村田春海と並び称され、本居内遠・城戸千楯・加納諸平・長沢伴緒・橘守部・大國隆正・鈴木重胤・熊谷直好・八田知紀・大隅言道・伴林光平らと交際があった。特に伴信友と親しかったとされる^{②)}。鈴木重胤は嘉永七年に岩槻の村人の紹介で巨智部方を来訪

したことは先にみたとおりである。このとき中島広足とも交流があったのであろう。中島広足については近年吉良史明氏によって、研究史を含めて詳細な検討がなされている⁶⁰。広足は、文政九年諏訪神社大宮司青木永章に招聘され、諏訪大神宮司学校の教授方として熊本から長崎に移り住み、檀園社中を組織したとされる。吉良氏は、天保十一年に門人が詠んだ歌を集めて広足が編纂した『瓊浦集』（天保十一年）から檀園社中の門人名を体系的に明らかにし、さらに門人たちを通じて行った異国情報⁶¹の収集の実態について明らかにされた。これによると、広足の門人たちはわかっているだけでも一七一名に及び、地域も肥前国長崎を中心に、肥平戸・島原・佐世保、肥後国熊本、筑後国柳川・三井郡・久留米、出雲国杵築・伊勢国山田・京都・大坂・和泉国堺・江戸まで地域的広がりを見せていること、門人の中核は長崎の地役人とし、その中には御役所附船番・町司触頭・遠見番所触頭、町年寄とその家族、乙名、長崎会所関係（請払役・目利・吟味役・取締役・筆者）、唐年行事司・唐通事附筆者・阿蘭陀通詞・糸割符宿老とその家族・僧侶・宮司・祠官・能楽師とその家族・庄屋・贅女など、多様な人々が含まれていることが指摘された。町年寄福田猶之進をはじめ、主要な長崎地役人を網羅し、また宿老では長崎糸割符宿老頭取濱武元興（治兵衛）・林博章（熊十郎）、京都宿老巨智部忠陽（英三郎）・清水正良（藤左衛門）・森川久矩（良右衛門）、堺宿老海部可昌（市右衛門）、大坂宿老金谷興讓らの名前がみえる。特に代々の京宿老が門人になっていることは注目でき、長崎と京をつなぐ役割をしていたことが窺える。広足の門人が長崎地役人を

中核としているとはいえ、京・大坂・堺の宿老たちを通じて各地にその名が知られて門人も増え、宿老たちが各地に広がる門人たちを繋ぐ役目をしていたことは疑う余地はない。また檜林公足やオランダ通詞西吉太夫、猪俣久蔭とも親交を深めていたことが記されており、海外情報の手はそれほど難しかなかったと考えられる。また中島広足自身もドイツ語の勉強をしていたことも報告されている⁶²。収集した海外情報には、天保十一・十二・十三年別段風説書・嘉永元・二年の別段風説書、嘉永五年・七年・安政五年の唐国風説書⁶³などが含まれ、門人たちのネットワークを活用して海外情報を積極的に収集していた事実を明らかにした。このような中島広足との交流は、巨智部忠陽にも大きな影響を与えていたと思われる。ここでは『日録』・『要録』から巨智部忠陽との関わりに注目してみたい。

中島広足との交流は、巨智部忠陽が京請払役として長崎に在勤していたころには既に始まっていたようである。十年余の務めを終え、帰京する天保十一年『日録』には、七月十四日「一、中嶋広足先生江中元祝義金百疋為持遣、たにさく拾五枚認方相頼置候事」、七月十七日「一、中嶋広足先生たにさく認来ル、銭別も来ル、伝言物も有奥二記」とあり、七月十四日には中元として金百疋を贈り、広足に短冊十五枚を依頼している。三日後には出来上がり、銭別として「一、書画七枚、一、たにさく 拾枚同人筆」が贈られている。また広足からの「伝言」として、「一、大坂金谷氏行代金一分、八月三日大坂中村へ為持遣候事、一、清水氏行紙包沓つ、又沓つ八月十三日、一、宇野氏書状一通、此状ハ七

月十八日出拾五番状之節為差登候事」の三件の依頼とその対応を書き記している。これらについては、大坂金谷氏に支払い代金一分を大坂宿老中村へ依頼する件は八月三日にすませ、京宿老清水氏宛ての紙包みを二つ八月十三日に送り、同じく京都町年寄宇野氏宛ての書状を一通を七月十八日出の十五番状差し出しの節送ったとしている。いよいよ長崎を出立する八月二十七日当日には、中島広足や京宿老森川氏や長崎・大坂・堺・江戸の宿老たちをはじめ、大勢の人々と別れを惜しんでいる。

次に中島広足が出て来るのは、京宿老として再び長崎に在勤するようになった弘化二年一月二十七日のことである。一月二十七日「廣足先生ヨリ初盆案内有之、松の森吉田屋也、各罷出当座も詠候事、金五十疋持参致候事」、七月十一日「一、広足先生へ金百疋為持遣候事」とあり、正月の挨拶として金五〇疋、中元祝儀として金百疋を持参している。翌弘化三年には、正月・中元に加えて、歳暮として金二朱を贈っていることがわかる。以後弘化四年正月金二朱、嘉永二年正月五〇疋、嘉永四年正月金五〇疋と、記載はまちまちである。嘉永五年一月十日「一、中嶋廣足先生へ再入門いたし候、金百疋持参之事」とあり、この年改めて正式に入門したことがわかる。「再」とあるので、おそらく京請払役として長崎に在勤していた時期に門人となり、帰京するにあたって門人から外れたのであろう。金百疋は入門料である。再入門後は、正月金二朱、中元として金百疋、歳暮金百疋が贈られている。

さて、宿老として長崎に在勤中、中島広足とその一門との交流はさかんだったようで、「月並歌会」が定期的に催されている。世話役は交代

で行っていたようだが、弘化三年二月十四日は、巨智部忠陽方で催され、来客や、献立など、歌会の様子がうかがえる。

「一、月並歌会此方当人ヶ所二而相催候、昼八ツ時案内也、夜八ツ半頃まで吞合候事

茶

菓子

鉢肴

上同

同

同

井

小井

片口

右同

飯 香ノ物

汁 上みそ 若芽

茶碗むし

鯛切身 ぎんなん
いか きくらげ 山いも

来客左之通り

中嶋廣足先生 徳見茂四郎 八里賢五郎 荒木寛次郎

伊勢村新九郎 勝木利助 高田徳十郎

不参左之通り

高石屋幸左衛門 半田宗次郎 石本卯之助

とあり、長崎宿老徳見茂四郎・京請払役八里賢五郎・大坂宿老伊勢村新九郎・江戸宿老附筆者小頭勝木利助など、長崎会所で業務に携わる五カ

所の面々が集まり、歌会を開いている。このような歌会が定期的に開催され、情報交換の場ともなっていたと考えられる。

また、巨智部忠陽は、中島広足と京都の門人との連絡の役割も果たしている。弘化三年三月二十日「清水の広足先生行 壹通」、閏五月二十日「広足先生行清水の書状一通」、七月十日「一京都へ書状左之通り差立候也、京西御用人行当地西御目付内深沢氏の広足宗匠の清水藤右衛門行メ式通」などあり、元長崎在番京宿老を務め、門人でもある京都系割符宿老清水藤右衛門（正良）との書状のやり取りを請負っていることがわかる。また安政二年一月二十六日には、

「一、在京光悦尼昨寅年七十賀会相催可申处、彼是混雑有之、今日相催候事、兼預寄竹祝 略懷紙

中嶋廣足宗匠

海部屋市左衛門

山際藤之助

井吉三郎兵衛

徳見茂四郎

森亦四郎

高田衛十郎

神崎与市

中嶋廣行」

とあり、在京の光悦尼の七十才を祝う歌会に広足と養子の広行、五ヶ所の宿老ら門人たちが参加している。光悦尼についても、書状のやり取りや、中元・歳暮は欠かさず贈っていることなど日記には頻出している。その詳細は不明であるが、中島広足や宿老たちとも関わりがあったようである。長崎と京都とのつながりを示す一例である。

また、嘉永七年六月には、嘉永四年十一月に來訪した岩槻の医師清水

幕末期長崎在番京宿老巨智部忠陽の交流関係

玄晏の添書きをもつて長崎に来ていた武川花積村の齋藤陸左衛門から金二朱で広足の短尺を依頼され、広足に短尺十葉を預け、同年十一月に献上差立のため出府する濱武に「廣足宗匠 たに尺四葉 武州岩月 斎藤山口へ書状添」を託している記事がみられる⁽⁶⁶⁾。長崎の中島広足と武蔵国岩槻の村人とのつながりも垣間見ることができ、巨智部忠陽がその仲介役としての役割を果たしていることが確認できる。

安政四年になると、二月三日「一、中嶋廣足宗匠并子息廣延明日出立二而上方筋江遊歴被罷越候二付、為錢別金百疋差送り候事」とあり、二月四日中島広足父子が上方筋へ遊歴のため長崎を出立することが記され、二月十八日「一、大坂今井江書状差上候事 但広足先生半舟添書加封之事」、六月二日「一、明日玉津屋平藏殿登坂二付大坂滞留 廣足宗匠 森亦四郎 清水氏江書状伝言之事」とあるので、その後は大坂に滞在したようであるが、書状のやり取りは行っていたようである。

巨智部忠陽は、請込役だったころから中島広足の門人で、天保十一年帰京にあたり、いったん門人ではなくなったようだが、その後も関係は続き、再び長崎に在勤することになってからも熱心に歌会に参加し、嘉永五年に再入門を果たしている。中島広足とその門人たちの交流は特別なものであったように思われる。中島広足が集めた別段風説書を始めとする海外情報が、このような交流関係の中で集められたことを考えると、それらの情報が門人たちの間でも共有されたであろうことは、容易に考えられることである。

まとめ

以上、長崎在番京糸割符宿老巨智部忠陽を中心とする長崎の在地社会における交流関係について、忠陽の日記・記録である『日録』・『要録』をもとに、その一端を明らかにした。一では巨智部忠陽や、ともに一家として生活する人々についても、その行動の一端を垣間見ることができた。また長崎における公私にわたる生活の中軸をなす五カ所宿老たちとの、私的な交流関係にも注目し、江戸・京・大坂・堺・長崎の宿老たちの親密な交流についても指摘した。また江戸・大坂・堺宿老が頻繁に交代する中、京宿老である巨智部忠陽は、継続して長崎で貿易業務を遂行し、地元の信頼も得て、安定的に各地の情報を入手できる立場にあったと考えられる。また巨智部忠陽が、長崎と京都を結ぶ太いパイプ役としての役割を果たしたこと、さらに長崎に諸国から集まる藩士・学者・医師・村人との交流の一端も明らかにした。また、二において、特に別段風説書をはじめとする海外情報を積極的に収集していた長崎聞役や、国学者中島広足、また翻訳の当事者であるオランダ通詞に注目して、その関係を明らかにし、相互に密接なかわりをもっていたことを明らかにした。

極秘とされた別段風説書の写本は、在地社会においても散見され、全文または部分的に、あるいは要約として在地の知識人の間で書写され、西洋の動向や時世を読み解く手段とされてきたのも事実である。ただその伝達ルートは明らかでない場合が多い。さらなる検討が必要である。

注

- (1) 『天保十一庚子年 従交代到帰京 日録』(以降『日録』と略記)。長崎歴史文化博物館所蔵。長崎での京請払役の務めを終えて帰京するまでの天保十一年から十二年にかけての日録からみていく。天保十一年の『日録』は六月二日から記載がはじまり、帰京が決まり、次に請払役として着任する八里賢五郎への仕事の引継ぎ・帰京の準備・連日に及ぶ長崎の人々との別れの様子が詳細に記されている。
- (2) 長崎歴史文化博物館所蔵。弘化二年から慶応二年まで二冊残されている。今回は、開港前の安政四年までを対象とした。以下特記しない限り史料の引用は各年『要録』である。
- (3) 拙稿「幕末期における長崎貿易商人の海外情報―巨智部忠陽長崎在番日記『要録』の検討―」(『青山史学』第三十九号二〇二二年)
- (4) 巨智部忠陽については、長田和之「幕末開港以降、長崎における中国人の言伝荷物商法について」(片桐一男編『日蘭交渉史 その人・物・情報』二〇〇三年) 同「長崎在番京糸割符宿老巨智部英三郎補遺」(『洋学史研究』二〇号二〇〇三年)を参照。
- (5) 註(64) 参照。
- (6) 『要録』では弘化二年までは巨智部英三郎、弘化三年は巨智部とのみあり、裏に「其誠」とある。弘化四年から巨智部忠陽との署名がみられる。本稿では、史料以外は、巨智部忠陽で統一する。
- (7) 嘉永六年『要録』正月四日の条
- (8) 長田氏によると、巨智部家の墓所は大音寺にあり、「安政二年丁卯七月廿九日没忠陽妻婦知子」と記されていることである。長田和之「長崎在番京糸割符宿老巨智部英三郎補遺」(『洋学史研究』第二〇号二〇〇三年四月参照)。
- (9) 阿部魯庵については、詳細は不明であるが、原田康夫「国の重要文化財と

なった広大医学資料館の「木骨」と後藤家（広島初の種痘にかかわった後藤松軒）（『広島大学医学部広仁会会報第六六号』（平成一六年））に、広島藩医後藤松眠の子松軒が、嘉永二年「長崎の蘭方医阿部魯庵の所でオランダ医学とオランダ商館医官のモーニッケから種痘法を学んだ佐渡ヶ島の長野秋甫が痘苗を魯庵よりゆずりうけ」とある。また、青木歳幸氏によって研究が進められた、科学研究費基盤研究(C)（一般）二〇一五～二〇一七「九州地域の種痘伝播と地域医療の近代化に関する基礎的研究」研究成果報告に、「長州藩青木周弼は、彼の門人で当時長崎にいた阿部魯庵から、同年七月二二日付の書簡を受け取り、種痘の準備をすすめ、九月二日に佐賀藩から分苗された。」とある。『天然痘との闘いー九州の種痘』（岩田書院二〇一八年）も参照。辻学二が嘉永四年巨智部忠陽方を離れたのは、この時期広まった種痘と関係があるのかもしれない。なお、青木周弼については、注（11）を参照。

- （10）近藤芳樹に関する研究は膨大にあるが、ここでは、その交友関係をとりあげた影山純夫「国学者近藤芳樹の交友ー国学者・儒者を中心に」（『日本文化論年報』4、二〇〇一年）、同（承前）（『日本文化論年報』5、二〇〇二年）、同（承前）（『日本文化論年報』6、二〇〇六年、山崎勝昭「雑記」（9）ー国学者たちの交友 春平と芳樹と重胤の場合」（『葎』24、二〇一一年）をあづけるとどめたい。『国史大辞典』（吉川弘文館）も参照。

- （11）青木周弼については、青木周弼先生顕彰会編『青木周弼』（昭和一六年）などがある。田尻佐編『贈位諸賢伝 増補版 上』（近藤出版社 一九七五年）にも記載がある。『国史大辞典』（吉川弘文館）参照。

- （12）鈴木重胤についての研究は膨大にあるが、ここでは樹下快淳『鈴木重胤の真人物』（明治聖徳記念学会大正一四年）、谷省吾『鈴木重胤の研究』（『神道史研究叢書』四）（神道史学会一九六八年）、及び交友関係をとりあげた山崎勝昭「雑記」（9）ー国学者たちの交友 春平と芳樹と重胤の場合」（『葎』24、

二〇一一年）をあづけるとどめたい。『国史大辞典』（吉川弘文館）参照。

- （13）柏木辰五郎については、鶴田文史監修『図説天草の歴史』（郷土出版社二〇〇七年）、松田唯雄『天草近代年譜 復刻』（国書刊行会一九七三年）を参照。

- （14）史料では「伊藤玄朴」とあるが、伊東玄朴のことであると思われる。嘉永二年佐賀藩に進言して、オランダ商館から牛痘種痘苗の入手に成功し、その後全国に広まった。伊東玄朴については、伊東栄「伊東玄朴伝」玄朴社一九一六年・複製版 八潮書店一九七八年、鳥居由美子「伊東玄朴ー江戸の種痘所創設の立役者」（九州の蘭学ー越境と交流）（思文閣出版二〇〇九年）を参照。また『贈位諸賢伝 増補版 上』（近藤出版社、一九七五年）、『国史大辞典』（吉川弘文館）などを参照。

- （15）成田与八郎については、詳細は不明だが、史料中に松尾流宗匠であることが記載されている。松尾流については、松尾宗倫「松尾流の歴史と代々」（井口海山・久保田宗也・中村昌生編『日本の茶家』河原書店一九八三年）、宮帯出版社編集部「茶道家元系譜」（『茶湯手帳』宮帯出版社）などに説明がある。

- （16）「堀内宗官」は堀内宗函（宗完・宗関・不識齋）をさすと思われる。堀内宗函については、堀内宗完「堀内家の代々」（井口海山・久保田宗也・中村昌生編『日本の茶家』河原書店一九八三年）、宮帯出版社編集部「茶道家元系譜」（『茶湯手帳』宮帯出版社）などに説明がある。

- （17）渡邊庫輔「崎陽論巧」（親和文庫第七号 昭和三九年）一〇三頁参照。また、松下鈞「福澤諭吉とビブリオテーキ」（『総合教育センター論集』二〇〇九年）によると、檜林建吉は嘉永七年西洋流砲術を学びに長崎に来た福沢諭吉に横文字を指導した一人でもあった。同時に通詞の檜林栄七郎からはスペルを教ったとある。

- （18）松村巖『維新史談』（明治二六年）一〇頁にその名がみられる。

- （19）オランダ通詞については、片桐一男「阿蘭陀通詞の研究」（吉川弘文館平成九

- 年)・同『江戸時代の通訳官―阿蘭陀通詞の語学と業績―』吉川弘文館二〇一六)を参照。
- (20) 長崎開役については、山本博文『長崎開役日記―幕末の情報戦争』筑摩新書187一九九九年を参照。巻末の参考文献に主要な研究一覧が掲載されている。
- (21) 中島広足については、注(59)・(60)を参照。
- (22) 拙稿「幕末期における長崎貿易商人の海外情報―巨智部忠陽長崎在番日記『要録』の検討―」(『青山史学』第三九号二〇二一年)参照。
- (23) 『オランダ別段風説書集成』(吉川弘文館二〇一九年)参照。
- (24) 榎林家については、「阿蘭陀通詞榎林氏事略」(渡邊庫輔『崎陽論巧』(『親和文庫第七号』親和銀行済美会昭和三十九年・八月)所収。)に詳しく、日記に登場する三名の来歴についても記されている。また片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』にも、随所にその名が登場する。
- (25) 渡邊庫輔『阿蘭陀通詞榎林氏事略』渡邊庫輔『崎陽論巧』(『親和文庫第七号』親和銀行済美会昭和三十九年・八月)参照。
- (26) 片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』(吉川弘文館平成九年)二三九頁。同「江戸時代の海外情報―鷹見泉石の情報活動」(『オランダ別段風説書集成』所収、古河歴史博物館編『鷹見泉石日記』全8巻(吉川弘文館二〇〇一―二〇〇四年)も参照。鷹見家文書(古河歴史博物館所蔵)にも別段風説書の写しが残されている。
- (27) 片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』二〇〇頁
- (28) 片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』二四一頁
- (29) 片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』二四四頁
- (30) 片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』二四五頁
- (31) 片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』二五四頁
- (32) 片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』二〇一頁
- (33) 片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』三四四頁
- (34) 注(25)参照。
- (35) 杉本勲他『幕末軍事技術の軌跡 佐賀藩史料「松乃落ち葉」』(思文閣出版昭和六十二年)三六一頁注(208)参照。
- (36) 渡邊庫輔『阿蘭陀通詞榎林氏事略』(『崎陽論巧』(『親和文庫第七号』親和銀行済美会昭和三十九年・八月)一一五頁参照。
- (37) 宮地正人『幕末維新期の文化と情報―沼倉延幸「開国前後、長崎における海外情報の収集伝達活動について―熊本藩・五島藩長崎開役(留守居)の活動を中心に(保谷徹編『幕末維新と情報』吉川弘文館二〇〇一年所収など参照)山本博文『長崎開役日記―幕末の情報戦争』ちくま新書一九九九年)参照。
- (38) 杉本勲他『幕末軍事技術の軌跡 佐賀藩史料「松乃落ち葉」』(思文閣出版昭和六十二年)
- (39) 杉本勲他『幕末軍事技術の軌跡 佐賀藩史料「松乃落ち葉」』一五八頁
- (40) 『オランダ別段風説書集成』四六三―四七三頁
- (41) 杉本勲他『幕末軍事技術の軌跡 佐賀藩史料「松乃落ち葉」』一六七頁
- (42) 杉本勲他『幕末軍事技術の軌跡 佐賀藩史料「松乃落ち葉」』一六九頁
- (43) 杉本勲他『幕末軍事技術の軌跡 佐賀藩史料「松乃落ち葉」』一六九頁
- (44) 杉本勲他『幕末軍事技術の軌跡 佐賀藩史料「松乃落ち葉」』二二二頁
- (45) 杉本勲他『幕末軍事技術の軌跡 佐賀藩史料「松乃落ち葉」』二二〇頁
- (46) 名村三次郎・貞五郎については石原千里『オランダ通詞名村氏―常之助と五郎を中心にして―』(『英学史研究』第二十一号 一九八九年)参照。
- (47) 片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』三六五頁
- (48) 片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』二五九頁
- (49) 片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』二五四頁
- (50) 片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』一四五頁

(51) 片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』二四五頁

(52) 沼倉延幸「開国前後、長崎における海外情報収集伝達について」(保谷徹編『幕末維新論集』吉川弘文館2001)。山本博文「長崎開役日記―幕末の情報戦争」(ちくま新書一九九九)などを参照。

(53) 奥四郎については、笠谷和比古『近世武家社会の政治構造』(吉川弘文館一九九三年)四二七―四三二頁において、熊本藩留守居が入手した長崎へのプチャーチン来航情報について、ロシア国書の和解写を薩摩藩長崎開役奥四郎から入手したことを明らかにし、また沼倉氏は、蘭学者柴田方庵の研究の中で、薩州開役奥四郎とについて明らかにしている。沼倉延幸「開国前後、長崎における海外情報の収集伝達について」(保谷徹編『幕末維新論集』吉川弘文館2001 93頁)所収・「蘭学者の長崎遊学と海外情報」(「日蘭学会会誌」三一、一九九一参照。また、薩摩藩開役大迫源七については、芳即正「島津斉彬の海外情報源」(『斉彬公史料月報』二、一九八二年)などがある。

(54) 東京大学史料編纂所島津家文書81-3-31

(55) 佐藤隆一「各論二 オランダ別段風説書―その公的回覧と私的書写―」(『オランダ別段風説書集成』吉川弘文館二〇一九)五七一頁。でも検討がなされている。

(56) 国立国会図書館憲政資料室所蔵

(57) 『西郷紀聞 完』都立中央図書館所蔵 特別買上文庫三九八一 中山文庫

(58) 長崎奉行大屋遠江守明啓は嘉永元年十一月一日から嘉永三年五月二日まで在任であるので、恐らくこの史料は嘉永二年のものである。このとき長崎奉行に伝えられた「別紙」は以下のとおりである。「○琉球国之内徳之嶋へ当正月廿四日異国船老艘漂来、異人六人橋船より上陸いたし候間、彼之差候異国并漂来之次第相尋候処、アメリカと相答、鯨を突候手様等致候、其外言語文字不相通候得共、漁船と相見え申候、食料拂底所望之様子手様致し候、漸

幕末期長崎在番京宿老巨智部忠陽の交流関係

相分候間、野菜相遣候處、別□相欽直ニ本船へ乗行、同二月六日同所へ異国

船老艘漂来、異国人七人橋舟より上陸致し候間、同断相尋候処アメリカと相答、其外言語文字不相通、前条同断漁舟ニ相見え食料望之体故野菜相遣候處、則本船へ乗帰り西ノ方へ乗行申候、同三月十七日琉球国之内那覇沖ニ異国船壹艘来着碇卸候間差越本国并来着之次第相尋候処、異国人ハ言語文字不相通、唐人壹人乗合、アメリカ船ニ而百三十七人尔て乗組、二月廿八日広東省之内香港出帆風波強く無掬来着致候旨申出候、然ル処、琉球逗留喫人義右船へ差越暫時罷在帰着致候、左候而ハ食料望出候ニ付、差贈り候処、同廿一日出帆申之方へ走行候、同閏四月朔日異国船老艘同所沖ニ卸碇候間、是又役々相越本国来着之次第相尋候処、乗組之内唐語大概通弁致し候者罷在、喫国船ニて二十七人内乗組頭妻壹人乗組去月九日廣東省之内香港出帆日本へ向通船之処、用水及拂底汐繫致し候、而三日も可致滞船出帆之旨申出、逗留喫人本国ニ差越乗組等六人箱船等兼而英人召置候寺へ到来候故、琉球役々とも乗頭江面会致し、去ル午年渡来之喫人長々滞留國中難渡致し候、此節別帰候様分而申申達候処、自是日本其外諸國へ経歴三四ヶ年後帰国候間、何分難應、其意趣ニ而一切不致承引、本船へ罷帰滞船中薪水等之品望出候間、差送置候処、同六日出帆子丑の間尔走り、無程帆顚影不相見、右四艘之異国船滞船中取締日時々堅固ニ取計□□、是又逗留英人儀ハ妻子共ニ平穩罷在、折角何國之免状相尋様子二候間、おのつから近々迎船可致渡来候間、早速帰国致し候様可取計旨琉球國役々并為警□□差渡置候役々共申越候御事 五月廿八日」

(59) 『国史大辞典』(吉川弘文館)に沼田哲氏による解説がある。また深濁久「郷土歴史人物事典(長崎)」(第一法規出版株式会社 昭和五四年)、弥富破摩雄「中島廣足」(厚生閣 昭和十九年)などを参照。

(60) 吉良史明「幕末期異国情報の伝播と長崎檀園社中(上)(下)」(『語文研究』一六二二〇一三年)。中島広足については、吉良氏の研究に依るところが大きい

い。

- (61) 上田由紀美「稀本あれこれ」(466) — 「やよひのうた」中島広足自筆『後夢路日記』所収」国立国会図書館月報No.549 二〇〇六年二月に、紹「やよひのうた」は広足による西洋詩(ドイツ語)の翻訳が紹介されている。

- (62) 長崎市諏訪神社所蔵諏訪文庫。『天保九年ヨリ十一年追風説書』・『嘉永元年申七月別段申上候風説書』・『嘉永七年酉二月別段風説書』・『嘉永五年辰唐国風説書』・『嘉永七年唐人風説書』以上五点合冊、『萬延元年唐國騒乱二付十二家船主程稼堂申立書』一冊、『唐國一揆騒乱之地名』一冊、『欧羅巴一致之国々地方国民之數武方之人數等書中拔萃之譯』(卷末に「此書ハ弘化二乙巳年夏長崎御目附遠山半左衛門殿通詞名村貞五郎二御文書セラレタルヲ写シタルナリ、同年五月二十六日 藤原貴恒」一冊、『エケレス人日記和解写全(天保十二年・天保十三年別段風説書)』一冊、『唐國當時賊寇騒逆之風聞左ニ申上候』一冊、などがある。いずれも「明治三十二年十月國幣小社諏訪神社献本宮司中島広行」の角印・長崎諏訪神社文庫の〇印が押印されている。

- (63) (60) 参照。

- (64) 天保十一年八月二七日「一今曉七ツ時森川氏今酒飯出ル、未明出立之事
松屋栄輔 飯田宗次郎 江川五郎兵衛 中村藤十郎 奥作次郎 藤井太兵衛
中島廣足 石川道安 鬼塚秀太郎 八里賢五郎 日雇頭富太郎 肴屋宗八
山口兵左衛門 今□下男金藏 八里供也 右一ノ瀬迄
岩田熊之進 右唐金境迄 是ハ入札中ニ付此所々歸ル
岩永常太郎 峯寅之助 下女さよ 岩田恒十郎 塩谷嘉四郎 手伝弥藏
山口善四郎 外ニ伊勢や市太郎ラクレテ一ノ瀬迄見へ候よし
右峠新茶屋迄此処ニて暇乞スル、誠二十ヶ年なごり相互ニ至而悪敷もの也
一森川氏八里氏今一ノ瀬ニて一盃有之候事
一峠ニて人々ニ分れてコヂツケ

十ヶ年うまくくひたる初かつを からしの涙今そもろくる

別れ路の瀧津なみたの水の上は、十ヶ年余のやつちよいなり」

- (65) 前章参照。

*本稿作成にあたり、長崎歴史文化博物館・諏訪神社菊池宣行氏に史料閲覧のお世話になった。記して感謝申し上げたい。

*本研究は、JSPS科研費20H01314の助成を受けたものです。